

主 題：私たちは主を宣べ伝える2

聖書箇所：コリント人への手紙第一 1章19-21節

私の知人があるときフランスの有名な画家にイエス・キリストの福音を語ったことがあって、そのときのことを私に話してくれました。福音を聞き終わったその画家が口にしたことは「君の福音は単純すぎる」でした。ギリシャの哲学者たちはパウロから福音のメッセージを聞いたとき、使徒の働き17章に書かれていた通り「あざ笑った」、つまり、彼らは福音を小馬鹿にしたのです。しかも、この動詞の時制は彼らはそれを継続して行ったことを表わしています。神が私たち人間に与えてくださった救いのメッセージを彼らは小馬鹿にするのです。ちょうど、私の友人が画家に福音を語ったときと同じです。

神が私たちのために備えてくださった救いのメッセージに対して、人々はそれを見下して笑うのです。恐らく、このギリシャの哲学者たちには、パウロが語る福音のメッセージが自分たちの知的好奇心を満足させるものではなかったのでしょう。もちろん、私たちも注意しなければ、知識を重んじる哲学者であったり、一般的に知識人と言われる人たちに福音を語る時、もし、私たちが彼らに「なるほど」と感銘を与えられると考えるなら、間違いなく、私たちは彼らが感心するような何かを福音に付け加えようとするでしょう。そういう誘惑を私たちは経験することがあるでしょう。ただ単純な福音ではなく、彼らが感銘を受ける何かを福音に加えなければならないと考えるのです。

このコリント教会の兄弟たちはこのようなことをしたのです。福音に人間の知恵を加えたのです。もちろん、この人たちは救いに与る前は人間の知恵を愛して、それを重んじていた人たちです。また、イエス・キリストを信じたからと言って、救いに与ったからと言っても、自分たちの周りにはこのように知恵を愛する者たちがたくさんいたし、悲しいことに、教会の中にもそのような人たちがたくさんいたのです。福音に何かを加えるということは、教会にとって大変危険なことです。

かつて、ロンドンのウエストミンスターチャペルで牧会をされていたキャンベル・モルガン師、この後、彼の後任はあの有名なロイド・ジョーンズ博士ですが、このモルガン先生がこんなことを言っています。「私は同僚のロイド・ジョーンズ博士がアルバートホールで、『神の教会を損なって、生きた福音をほとんど破壊してしまった近代主義の傾向は、人々が啓示から転じて哲学に向かったときに始まる』と言ったのを聞いた。この話を敢えて敷衍（ふえん）するまでもない。この話そのまま、ここに書いてある。」。教会が、本来なら、神のみことばにしっかり立って歩むはずなのに、それがだんだんと近代主義、異端へと走っていくのです。なぜそういうことが起こるのか？その原因として挙げているのが「神のみことばよりも人間の知恵に重きが置かれたことによる」ということです。今から約80年ほど前にこのようなメッセージが語られたのです。今、私たちはそのようなことを周りに見ます。そして、約2000年前、このコリント教会も同じことを経験していたのです。確かに、福音のメッセージは時代や場所に関係なく、これまでも何度も歪められて来たのです。

パウロが第一次宣教旅行において四つの教会を開拓しました。ピシデヤのアンテオケ、イコニオム、ルステラ、デルベ（使徒の働き13：14-14：23）に教会を造りました。でも、これらの教会の中にもコリント教会と同じような問題が存在していたことがパウロによって記されています。それを記しているのが「ガラテヤ人への手紙」です。

◎「問題が存在」：真理から離れた

ガラテヤ1：6「私は、キリストの恵みをもってあなたがたを召してくださったその方を、あなたがたがそんなに急に見捨てて、ほかの福音に移って行くのに驚いています。」、彼らはほかの福音に移り始めたのです。パウロが言うように、ほかの福音などどこにもありません。また、3：1でも「ああ愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に、あんなにはっきり示されたのに、だれがあなたがたを迷わせたのですか。」と言っています。真理から迷い出てしまったと。5：7にも「あなたがたはよく走っていたのに、だれがあなたがたを妨げて、真理に従わなくさせたのですか。」と言っています。ですから、この教会も同じようなことが起こっていたのです。クリスチャンたちが真理から離れるということ。

では、なぜ、そのような問題があったのか？そのこともパウロはこの手紙の中で教えています。

◎その原因：群れをかき乱すにせ兄弟たち

ガラテヤ1：7を見てください。「ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるわけではありません。あなたがたをかき乱す者たちがいて、キリストの福音を変えてしまおうとしているだけです。」、教会の中にクリスチャンたちをかき乱す者たちが入り込んで来て、キリストの福音を変えようとしていると言います。2：4にも「実は、忍び込んだにせ兄弟たちがいたので、強いられる恐れがあったのです。彼らは私たちを奴隷

に引き落とそうとして、キリスト・イエスにあって私たちの持つ自由をうかがうために忍び込んでいたのです。」とあります。ですから、どの時代でもどこの場所でも、必ず、このような悪の働きが為されるのです。間違った教師が入り込んで来た、そして、神の真理を曲げようとするのです。ですから、私たちは時代に関係なく、この福音の真理を妥協せずを守り続けていかなければなりません。

◎「存在した問題」：救われるためには律法を守るとい「行い」が必要であるという教え

ガラテヤ教会、諸教会に何が起こったのか？彼らは福音に律法を付けたのです。彼らは律法を守ることによって、こういう行いをすることによって救いに与ると、そのようなメッセージをし始めたのです。にせ教師たちが持ち込んだ教えは律法主義でした。パウロは言います。ガラテヤ2：21「私は神の恵み
を無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそキリストの死は無意味です。」、ガラテヤ4：9-11「：9 ところが、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに、どうしてあの無力、無価値の幼稚な教えに逆戻りして、再び新たにその奴隷になろうとするのですか。：10 あなたがたは、各種の日と月と季節と年とを守っています。：11 あなたがたのために私の労したことは、むだだったのではないか、と私はあなたがたのことを案じています。」と。

私たちはどの時代であっても、この神の真理を妥協しないで語り続けること、それを守り続けるという責任を主から与えられているのです。だから、パウロが常に言うことは、キリストの福音のすべてを正確に宣べ伝えることで、それに何を加えても、また、除いてもならないということです。それが今学んでいる「コリント人への手紙」の中でコリントの教会に宛ててパウロが教えたことです。

同時に、パウロが与えた彼らへのこの戒めは、私たちにとっても大切な戒めです。というのは、ある教師たちはみことばを語る時に、会衆の気持ちを考えて語るべきかどうかを判断します。こんなことを語ればみなは傷つくのではないだろうかとか、こんなことを語れば希望を失ってしまうのではないかと…。私たちは聴衆の気持ちよりも主のお気持ちを考えて語らなければならないのです。聴衆を喜ばせるためにみことばを語るのではなく、神に喜んでいただくために、神のことばを正確に記された真理を語るのです。

パウロはそのことについてこのように言います。Iテサロニケ2：4「私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです。」、こうして前で語る人間もそうです。個人的にだれかと話すときもそうです。私たち信仰者にとって最も大切なことは神のメッセージをその通り語ることです。神の真理を語るのです。パウロはそのことを望むのです。だから、福音に人間の知恵を加えたコリント教会の兄弟たちに対して、今一度、神の真理に立ち返るように、福音の真理に立ち返るようにと、そのことをパウロは願って、彼らが神からいただいた救いに立ち返るよう、その救いを今一度彼らに思い起こさせるのです。

どのようにしてあなたがたは救われたのか？どのようにしてあなたがたは罪の赦しをいただいたのか？そのことを思い出しなさいと。ですから、この1：19から31節まで、特に、救いについて教えます。前半の25節までは「救いは神の恵みだ」ということ、後半の26-31節は「救いは神の選びによる」ということです。そこに人間の知恵が入る隙間はないと言います。

◎「神の救い」について

・神の恵みによる救い — 知恵によるのではなかった 19-25節

・神の選びによる救い — 知恵によるのではなかった 26-31節

A. 神の恵みによる救い：知恵によるのではなかった 19-25節

1. 人の知恵に対する神の裁定 19-20節

「裁定」は「神のさばき、神の見解」です。どのように神が人間の知恵をご覧になっているのか？そのことが記されています。それを見る前に、もう一度1：17を見ましょう。17節の最後に「…ことばの知恵によってはならないのです。」とあります。思い出してください。「ならない」という否定語が文頭に来ています。ということは、この否定を強調するのです。こういうことが絶対にあってはならないと。つまり、福音をその結果によって、また、自分たちが期待する結果を生み出そうとして語ってはいけないということです。私たちは当然メッセージを語る時に、このすばらしい救いを神は提供してくださった、すべての人がこの救いに与ってほしいと願います。そのように祈りながら語るのは当然です。

でも私たちが、多くの人たちが救われてほしいからとしてそのために手を加えるということは間違っています。福音宣教は人間的な技法に頼ってはならない、人間の知恵によってこの働きを為してはならない、これがパウロが強調したことです。福音のメッセージをシンプルに語るならそれは「単純すぎる」と人は言うかもしれない。そして、あなたもそう思うかもしれない。でも、神はそれを私たちに命じられたのです。なぜ、神はこんなことを言われたのでしょうか？もし、私たちが人間の知恵や巧みな話術で福音を語るなら、人々の関心は神ではなく語るその人に向けられてしまいます。もちろん、パウロはしようと思うなら、彼の知恵と話術で人々を魅了させることはできたでしょう。しかし、彼は何があって

もそのようなことはしないと固く誓っていました。それは、彼が人々の関心が神にだけ向けられることを願っていたからです。神だけが誉め称えられること、それがパウロの唯一の関心でした。

*** 福音を混ぜ物をしないで語る理由 :**

・ **主から与えられた務めだから :** 福音を正確に伝えること

何度も話しているように、神は私たちに「人を救え」とは言われていません。できないからです。福音を正確に語ること、それが私たちの務めです。

・ **主の栄光が現わされるから :** 救いのみわざによって

そのメッセージを使って神が罪人を救いへと導かれるのです。そして、神ご自身の栄光が現れます。だから、私たちはこのメッセージを正確に語っていかうとするのです。

レオン・モリス先生は「十字架をありのまま信仰をもって宣べ伝えれば、聞く者はその信頼を人のわざではなく、神がキリストにあってなされたことに置くようになるであろう。」と言っています。今話して来たように、もし、私たちが神のみことばをその通り語るなら、人々は神に目を向けるようになります。それが私たちが願っていることです。かなり前ですが、シカゴのムーディー教会を牧会されたアイアンサイド師はある時、こんな話をされました。「ある人がイギリスの田舎からロンドンに行き、そこで当時ロンドンにおける著名な牧師たちのメッセージを聞いた。彼は次のような手紙を妻に送った。『この前の日曜日、午前中はA先生の教会へ（A先生はこの当時ロンドンで最も雄弁で感銘を与える一人の牧師先生でした。手紙にはその名が記されていました）、夕拝はチャールズ・スポルジョン先生のメッセージを聞きに彼の教会へ行ったよ。どちらもすばらしい先生たちだったよ。間違いなく、A先生はすばらしい説教者だよ。でも、スポルジョン先生の救い主はすばらしいお方だよ。』」と。

私たちはいったいだれを人々の前に明らかにしようとするのでしょうか？間違いなく、私たちではありません。私たちがみなに見ていただきたいのは、私たちのすばらしい主です。そのために必要なことは「神のメッセージをその通り語る」ことです。

神のメッセージを神が望まれておられる方法で語って初めて、神の望まれる結果が期待できる

もし、私たちが神のみわざを期待するなら、神のみわざが為されるために私たちは神のおことばを混ぜ物をしないでその通り語らなければなりません。それが私たちに託された責任であるとみことばは教えます。

福音の力を語ったパウロは、19節から続けて、彼らの信仰の矯正を行っています。19節「それは、こう書いてあるからです。「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしくする。」、実は、このことばは旧約聖書イザヤ書29:14からの引用です。13節から読みます。「:13 そこで【主】は仰せられた。「この民は口先で近づき、くちびるでわたしをあがめるが、その心はわたしから遠く離れている。彼らがわたしを恐れるのは、人間の命令を教え込まれてのことにすぎない。:14 それゆえ、見よ、わたしはこの民に再び不思議なこと、驚き怪しむべきことをする。この民の知恵ある者の知恵は滅び、悟りある者の悟りは隠される。」、このことばの通りではありませんが、パウロはこの箇所を引用しました。

ここで何が教えられているのか？この当時、エルサレムの人々は「自分は神を信じている」と告白していました。そして、実際に彼らは礼拝にも加わっていました。しかし、悲しいことに、彼らのささげた礼拝は心からのものではなかったのです。彼らの関心は人が作った律法的な規則を、また、これまでの習慣を守ることだけでした。彼らは神のみことばに従うということには全く関心を払っていなかったのです。それでいて「自分たちは神に正しく喜ばれている」と信じていました。このような状態にあったのです。そこで神は彼らにさばきを約束されたのです。

・ 「知恵ある者の知恵を滅ぼし、」 ⇒ 消滅する、滅びる、役に立たなくする

・ 「賢い者の賢さをむなしくする」 ⇒ 無効を宣言する、廃棄する、無にする

神は知恵があると思っていた彼らの知恵を消し去ります。このみことばをパウロはここで使って、人間の知恵がいかにむなしいものかを人々に教えるのです。この教えは継続しています。20節をご覧ください。「知者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の議論家はどこにいるのですか。…」、確かに、この一つ一つのことばには意味があります。

・ 「知者」 : 賢い、学に熟達した、知恵、教養のある

・ 「学者」 : 律法学者のこと

・ 「議論家」 : 古代ギリシャで、一般教養、政治、修辞（これはことばを効果的に使って表現し、美しいことばで表現する学問）、討論など、公人に必要な学問を教えた教師のこと

このようにギリシャ語の辞書が説明しています。これらの名称、タイトルで呼ばれた人たちは、当時、コリントにおいて「知識人」として扱われていた代表的な存在です。これ以外にもたくさんいたのです。パウロはこの三者に触れることによって、すべての知識人を指して話しているのです。そして、知識を重んじるすべての知識人に対して、神がどのような見解をもっておられるのかを明らかにするのです。

20節の後半「神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。」と。英語の聖書ではこのように訳しています。「愚かなものにされたのではないか？」と。

これまでの歴史を振り返っても、先にイザヤ書で見ましたが、繰り返し人間が自分の知恵を誇り、自信過剰になったとき、神は彼らを滅ぼして来られました。だから、ここで「愚かな者にされたのではないのか？あなたがたはそれをもう見て来たでしょう？」と言うのです。「人間の知恵がどれほど優れていると言っても、神の前では「愚か」、つまり、無価値で役に立たない」ことを教えたのです。

さて、皆さん、なぜ、「人間の知恵」が神の前に「愚か」なのか？と考えませんか？それは、人間の知恵は私たちの創造主なる神のところに、罪からの救いへと私たちを導くことが出来ないからです。どのような知恵であっても、その知恵が私たちを救い主のところに導いてくれるなら、それは価値のあるものですが、どんなに知恵を蓄えてもそれは私たちを神に近づけるのではなく、かえって神から遠ざけるものです。確かに、宇宙にロケット、探査機を飛ばす頭脳・技術をもっている、それによって神を信じることはないのです。どんなに知恵があっても、罪の赦しをいただけないければ、その人は永遠のさばきに至るのです。もっとも大切な「永遠のいのち」へと導くことの出来ない人間の知恵の愚かさ、むなしさ、それをパウロはここで明らかにしたのです。

もし、知恵が私たちを救いへと導くなら、知識人はみな救いに与っています。ところが、悲しいことに、知識人と言われる多くの人たち、最近の探査機ですが、なぜ、そこに送ったのか？そこに生命誕生の秘密を発見することができると言います。聖書ははっきりとどうして人間が誕生したのか？どのようにして私たちが存在するようになったのか？を教えています。神が造ったと。でも、それを信じないゆえに、何かの原因で何かのチャンスでいのちが誕生したと言います。神は人間のそのような姿を見て何と言われるでしょう？みことばの中にその人間の愚かさを見て「笑われる」と記しているところがあります。我々はこれだけの知恵を得たのだ、ロケットを飛ばせるだけの技術と頭脳があると、でも、一番大切な神を知ることには向かないのです。

ローマ書1：22、23にこのように書かれています。「:22 彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、:23 不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。」、なぜ、神は知恵あると言っている者たちに「あなたがたは愚かだ」と言われるのか？それは、彼らが真実でない神を崇拝するからです。真実でない神を信じるからです。偽りの神、神ではない存在を神として信じているからです。つまり、彼らは何が真理であるかを見分けることができないのです。私たちは「私たち日本人が言う神と、聖書が教える神とは全然違う」とよく話します。私たちが手を合わせる存在はかつての偉人であったり、動物であったり、人間が作ったもので、それらはすべて創造主ではありません。私たちの先祖に対しては当然敬意を払うべきですが、彼らは創造主ではありません。神ではないのです。人間が作った像があったとしても、その像が何かを作りません。それゆえにそれらは創造主ではないのです。世の中の知恵は真理へと導いて行くでしょうか？お気づきのように、どんどん真理から離れて行きます。

パウロがここで教えたように、自分たちは知恵がある知者だと言っても、まさに、愚かだ、知らなければいけないものを知っていない、知らなければならぬ真理を知っていないと。いったい何が正しいのか？何が真実なのか？そのことを知恵は見極めさせてくれない、そんな知恵が何の役に立つのか？と言うのです。

2. 人の知恵は救いの障害 21節

1：21「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。」「自分の知恵によって神を知ることがない」と、これも否定を強調しています。今見て来たように、この世がどんなに知恵を得たとしても、その知恵によって神を知ることにはない、絶対にないとそのことを強調したのです。皆さんに見ていただきたいのは、その後「それゆえ、神はみこころによって、宣教のこぼの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。」とあり、「神はみこころによって、…定められた」というところです。これはギリシャ語では一つのことばです。この意味は「喜びとする、意に合う、お喜びになる、大変満足された」です。この21節のことばを直訳するとこうなります。「なぜなら、神の知恵において、この世はその知恵によって神を知ることがない。（福音の）メッセージの愚かさを通して信じる者を救うことを神が喜ばれた。それが神の意に合うことだ。」と。これがこの21節でパウロが教えたかったことです。

いったい何を神はお喜びになるのか？いったい何が神の意に合うことなのか？それはここにある通り*「宣教のこぼの愚かさを通して、信じる者を救おう」とすること。これが神がお定めになったこと、これが神の意に合うことだと言うのです。これが神が定められたこと、神のご計画だったのです。「宣教のこぼの愚かさ」とあります。最初に見た通り、私たちがイエス・キリストを単純にその通り話したときに、人々は「くだらない、単純すぎる、愚かだ」と言うかもしれません。「イエスを信じるだけで罪

が赦されるなんて、そんな馬鹿な話はない」と。でも、神はこのメッセージを使って、このメッセージを信じる人に救いを与えてくださるのです。それが神ご自身のご計画なのです。

*「信じる者を救おうと定められた」 : イエス・キリストが私たちの罪を負って十字架で死んでくださった、本来なら、神に逆らって来た私たちが受けなければならない神の怒りを代わって受けてくださった。イエスの十字架はあなたに向けられていた神の怒りをイエスが代わって受けてくださったのです。イエスは十字架であなたの身代わりとなってご自分の聖いのちを捨ててくださったのです。あなたを罪から救い出すためです。そして、イエス・キリストが確かに神であり、救い主であることを証明するのは、イエスが約束通り三日後によみがえって来られた復活でした。確かに、この方はすべてをお造りになった神であり、この方は私たちが憐れんでくださるお方であり、私たちが愛してくださるお方であり、そして、私たちの罪のために喜んでご自分のいのちを捨ててくださったお方であり、この方によって救いは完成したのです。主イエス・キリストを信じる者はだれでも、その罪を赦していただける、この人間からすれば愚かなメッセージ、人々が見下すようなメッセージあっても、この救いのメッセージには力があるのです。なぜなら、これこそ神が私たちに与えてくれる救いのメッセージだからです。

イエス・キリストを信じるすべての人に神は救いを与えてくださる。この「救おう」という動詞は現在形です。「救いのチャンス」は今も神によって与えられているからです。もし、あなたが自分の罪を神の前に悔い改めて、イエス・キリストが十字架によって備えてくださった完全な救いを信じて、この方をあなたの神として、救い主として従って行こうとするなら、神はあなたに救いをくださる。人間がどう思うかではないのです。神がどう思うか？です。人間がどう言うかではなく、神が何と言われるか？です。

今日、私たちが見て来たのは、パウロが福音に人間の知恵を加えてしまったコリント教会の人たちに対して、もう一度救いを思い出させる、そのことです。あなたがたが救われたのは、福音+人間の知恵によってなのか？それとも、人々が「愚かだ、馬鹿げた話だ」と侮辱するその単純な福音を信じたことによるのか？思い出しなさいと言います。あなたは神の恵みによって救われたのだ、この福音を信じる信仰によって救われたのだと、そのことを先ずパウロはコリント教会の人たちに教えたのです。そこに戻りなさい。そして、あなたがたが信じたことを今度は語っていきなさいと言うのです。

皆さん、みことばは私たちに神のみこころを教えてください。ある人にとっては励ましかもしれません。なぜなら、福音を語っても語っても何も起こらないから。でも、神は喜んでおられます。神が託した働きをあなたは忠実に為しているからです。私たちにどれだけの機会が与えられているのか分かりません。でも、私たちがこの地上にいる間、私たちはこのキリストの福音をみことば通りに語っていく者です。それが神が私たちに教えてくださっていることであり、命じてくださっていることであり、そして、それだけが神のすばらしさを世に証する神ご自身の方法です。しっかりして、このみことばにしっかり立って、救いを恥じることなく大胆に語り続ける信仰者として、この一週間、置かれた所で歩いていきましょう。